

第29回 交流会「よりよく生きるために」

📖 ブックリスト 📖

1) 日本出身香港在住 オーストラリアの大学院生 Uyaさん 『キャリアとライフ「迷ったら、楽しそうな方へ」』

「迷ったら、楽しそうな方へ」人生のさまざまな選択をする上での私の指針です。私は民間企業を退職後、パートナーのいる香港に渡りました。そこで修士号を取り、現在はオーストラリアの大学院で博士課程に在籍しています。それでも拠点は今も香港です。それは香港における、ろう者の子どもと聴者の子どもがともに学ぶ、共籍教育の言語実践について興味があり研究を続けているからです。パートナーの存在も大きいです。パートナーは香港とオーストラリアにつながりを持ち、香港で都市計画の仕事をしています。付き合って10年目になり、今はお互いの暮らしが、お互いに入っていく感覚があります。

とはいえ、私の大学院生としての最後の1年はオーストラリアで過ごし、将来もオーストラリアで働きたいと思っています。そんな折、パートナーが香港で家を購入しました。自分のキャリアとパートナーのキャリア、そして二人の将来。お互いにとって「よりよく生きる」ためにはどのようなプロセスを経て、どのような選択をしていくべきでしょうか。



2) 介護職員を経験した生活相談員 小森 あゆみさん 『一人ひとりがあるがままでいられる場づくり —介護福祉の現場から—』

「その人のあるがまを受け止めること」は介護福祉施設で働く私の基本姿勢です。生活相談員は、利用者さんを直接介助するわけではありませんが、利用者さんやそのご家族にとって快適な環境を整えられるよう、利用者さん側と施設側との間に立ち、双方を調整する仕事をしています。調整役として、介護職員や看護師、栄養士、ケアマネジャーなど様々な人と密に連携を取りながら仕事するのは難しい側面もあります。対応ひとつとっても正解というものはなく、「この対応でよかったのだろうか」と悩むこともしばしばです。しかし、介護職員の時に経験した多様な利用者さんとの出会いが日々の原動力になっていて、生活相談員である今も、利用者さん一人ひとりの個性を受容できる、その人にとってのよりよい環境づくりを目指しています。私の経験を通して、お互いに個性を受け入れ合いながらよりよく生きることについて一緒に考えてみませんか。



3) 山梨の県職員らしからぬ県職員 小宮山 嘉隆さん 『さまざまな人とのつながり、そしてたどり着いた今』

山梨県職員として、私は現在、多文化共生事業に取り組んでいます。この事業に出会ったのはつい最近のことですが、やっと出会えた、これからもずっと続けていきたい仕事だと心から思います。これまで、生活保護のケースを通じて出会ったひとや私自身の家族など、様々なひととの関わりを通じて、自分とは何か、また自分には何ができるのかを問うてきたと同時に、関わるすべてのひとを笑顔にしたいと思いつけてきました。そんな時に多文化共生事業を担当するようになり、改めて「人間関係作り」についてじっくりと噛み締める時間に出会いました。人間関係作りとは、コミュニケーションをとるだけでなく、お互いに協力する力(汗をながし、時間をともにする)、自己肯定感(自分はここにいていいという感覚)があって成り立つものだと気づきました。県の事業もどっしりとした人間関係作りがあってこそ、ではないでしょうか。参加者のみなさんとの出会いに感謝しながら、よりよく生きることを、一緒に考えていけたら幸いです。



4) ぶんじ寮プロジェクト企画メンバー&ご近所 よこさわさおりさん 『よりよく生きるために大切にしていること』



東京・国分寺に住んで11年。私が「地域の中で生きる」こと考え始めたのは、子どもが産まれたことがきっかけでした。それまで国分寺は家がある場所にすぎなかったけれど、子育ての難しさを感じたことで、よりよく生きるために「地域」という多様な関係性のなかに身を置くことを意識し始めました。そんな中、もともと子どもたちの「居場所」だったプレイステーションという場所がなくなるという経験を経て、新たな「居場所」を作るために、ぶんじ寮という「まちの寮」を作るプロジェクトに加わり、今に至ります。

ぶんじ寮は、様々な背景の人たちが持ち寄り、支え合う「安心と冒険が同居する一人一人の居場所」をモットーとしています。ゲストルームや畑などの共用スペースがあり、入居者に限らず自由に出入りできます。ぶんじ寮での様々な出来事を眺めると、価値観のずれを感じながらも、異なる意見を排除せず、たとえいびつな形でも関係があり続ける姿に出会います。今回は、ぶんじ寮での経験や、それ以前の経験を通して考えた「地域の中でより良く生きる」ことについてお話ししたいと思います。

5) 難民移民に関わるNPOで働き13年 シホさん

『目標はつからない、目の前の関心ごとに集中するシホさん』



私の仕事は、日本に暮らす難民への理解を広げるための社会への発信です。今の仕事にたどり着いたきっかけは、アメリカ・オハイオ州での1年間の高校留学です。「白人」7割、「黒人」3割、中国からの移民の兄弟2人という地元の高校に入り、はじめて自身のなかにある偏見や差別意識を突きつけられました。その後、社会人を経て、その時の経験を探求するため、アメリカと日本の大学院で移民に関して学ぶ機会を得ました。誰しもが抱える偏見や差別意識をどのように乗り越えていけるか、目の前の関心からよりよく生きるヒントをみなさんと考えていきたいです。

6) 模索する者 勝越(とう えつ)さん

『「典型的」「非典型的」の狭間での模索』

「よりよく生きる」とは何なんだろうかと、模索しながら生きています。幼少期に中国と日本を移動した経験を活かそうと日本語関連の専攻に進学しましたが、一般の大学生のように新しい分野に挑戦した方が視野が広がったのでは、と悩みました。研究者を目指し大学院に進学後も、研究面だけでなく、いつまでも「学生」と見做されることや、同年代の友人との社会経験の差に悩みました。「典型的」「非典型的」というような構造の存在が、「悩み」の中心にあるような気がします。

一方で、「典型的」でなくても、模索の試みは止めたくないです。これまでの模索の中で、例えば、日本にいる「典型的でない」自分が、周りの人が中国語を学ぶきっかけになったと聞いて、自分の影響力を感じました。よりよく生きるためには、悩み続けなければならないのかもしれませんが、模索しながらも、自分や周りに何らかの良いことをもたらすことができたらいいなと思っています。このような悩み・模索について皆さんと一緒に考えたいと思います。



7) 日英ハーフを育てるワーキングマザー 田中まきこさん

『グローバルって何？一国際化の未来に生きる娘に何が必要なのかー』

私はイギリス人の夫と結婚し、娘が1人います。娘は現在インターナショナルスクールの中学1年生で、日本の学校制度では小学校5年生です。娘を英語の世界に入れたのはふとしたきっかけでした。3歳の時、周りの子がイングリッシュスクールに入ったこともあり、深く考えずに同じ場所を選びました。しかし今、娘の進路について悩んでいます。母の私から見て、娘は英語の教育を受け、英語の思考を持って育っています。私の時代は、英語が話せれば世界が広がると思われていましたが、今は英語が話せただけではどうにもならないのです。このままインターナショナルスクールを卒業した時、どんな未来が待っているのでしょうか。中学校から日本の学校に通わせたらどんな未来になるのでしょうか。どちらが娘にとって幸せなのか、娘がよりよく生きるために、親としてどのような選択をすればいいのでしょうか。私たちのこれまでとこれからについてお話しします。

